

「より確かな思いをつなげるために」

一 ほんまの思いを出し合う全体学習の実践 一

徳島県同教・板野町立板野中学校

富加見 正夫

この報告は部落問題解決のために、また、自分の差別意識の払拭のために必死で全体学習に関わってきた生徒や教職員、保護者の人たちの思いを代表して報告させていただきます。

ほんまの思いを出し合う全体学習へ

どこから何をどうしたらよいのか。辛く、やり場のない思いを持つ生徒の姿に、本当の思いを隠しながらやっと答える生徒たちに、私たちは十分応えることができず、あれこれ試行錯誤を繰り返してきました。そんな中で1990年、何かをつかむんだ、何かを変えていくんだの思いのもと、2年生の全体学習がスタートしました。

まず、全学級が同一歩調で歩むことと、部落問題を本音で話し合いができるようにすることの二つを目標に置きました。その目標達成のために、学級での部落問題学習や部落出身生徒が夜の6時から週2回、部落問題学習や教科の学習をしている学習会の場で、今も部落差別に苦しむ生徒がいるのはどうしてか、なぜ学習会ができたのか、等を繰り返し繰り返し確認しあいながら、部落問題の解決に向かって連帯していけるように取り組んできました。このことは学習の場での実践以外にはない。自分につながってくれる、互いに自分を支えてくれる仲間ができたときに本音で語ることができる学習につながっていくと確信して行いました。

しかし、最初の3回は今までのような形ばかりに終始した学習に終わり、前もって用意された学習プリントを読む生徒や建て前の発言が続きました。そのような全体学習を変えたのはK子の言葉にならない訴えでありました。このことがあって、今まで語らなかった自分の本音を生徒に語りかけていく担任。そのことばに衝撃を受け、立ち上がろうとする生徒。その生徒によって自分を見つめ、苦しい思いの中から頑張っていく教職員の姿が見え始めました。このような学習で、自分たちの中にある見えていなかった差別が初めて見えだし、差別への怒りを新たにする生徒が増えてきました。自分の両親の差別意識を声を詰まらせながら話す生徒。ゆれながらも部落出身であることを語る生徒など、本音での発言がでてくるようにもなりました。

91年、この全体学習が職員間での賛否両論ある中で、全学年の実施へと広がりました。全体学習の事前学習として全学級が同じ資料で学習し、さらに学習会の会場でそれぞれの意識を確認し合い、思いを深め、全体学習に臨んでいきます。この全体学習は本音が多く出て、どんどん深まるかに見えましたが、ややもすると発言が重くなる時もありました。そんなとき部落出身生徒の涙ながらの発言に感性を揺り動かされ、差別の現実を見せられて発言をするという場面や、発言はするが自分自身の問題としてではなく、自分がこのように発言しているのにAさんはB君はと、他人を責めたり発言を押しつける場面もでてきました。

92年～94年と、このような反省をしながら、部落問題学習は何のためにするのか、誰のためにするのかを繰り返し、繰り返し問いかけ学習を実践することにより、多くの生徒の意識が自分自身の問題であると気づき始めました。

私たちの身近な問題を資料にした「学習会の友」の全体学習の場では、学習会に参加している生徒が「学習会の部落問題学習は楽しい。自分の本音と言えるし、自分のいったことに対してみんなが応えてくれる。今は部落に生まれたことが誇りに思えるようになった。」と話すと、続いて「自分も部落に生まれた。みんなと同じように学習会に参加し、部落差別に立ち向かっていか

なければならない。しかし、今までの自分は逃げてばかりいた。これからは学習会に参加してみんなと一緒に部落問題の解決を目指して頑張りたい。」と今まで自分自身が学習会についてのマイナスイメージでとらえていた考え方を払拭していくと同時に、部落外の生徒に自分たちの思いをしっかりとつかんでほしいと、力強く宣言する生徒が増えてきました。

部落外の生徒は自分のこれまでの学習を振り返って「学習会は自分と関わりがないと思ってきた。だから1・2年生の頃は差別はなくさなあかんとか、差別をしないようにします。と先生が喜ぶようなことを言ってきた。今考えるとこんな自分を恥ずかしく思います。」と言い、また、ある生徒は「私のばあちゃんは、部落差別をします。部落の子とはあそばれんよ・・・とか言います」と家族の差別意識のことを語り始めました。このように自分の心を解放するにしたがって、心の奥底に隠していて苦しかったことや自分の本当の思いを語り、ややもすると表面のきれいな事ですましていた他人事の部落問題学習が、全校生の中での学習で本音を出し、自分自身のこととして語れるように変わってきました。

本校の全体学習はPTAをはじめ、学習に参加したい人は誰もが自由に参加できるようになっています。これまで県内外を問わず、多くの人たちが全体学習に参加し、意見を述べてくれることにより、部落差別の解消に向けて一緒に連帯できる仲間となると共に、これからの方向や問題点を示してくれます。そのことがさらに我々や生徒、全体学習に参加し一緒に学習した人たちの解放への力となっていくのだと思います。

丸岡忠雄さんの書かれた資料「ふるさと」の1年生の全体学習に参加した高校1年生のF子は、「同和問題のLIRの時間は全然発表ができないし、心が重いです。空気が吸いにくいです。担任の先生と積極的に話しをしていってLIRの雰囲気を変えられるように自分の本当の思いをぶつけていきたいです。今の自分は何もかも逃げ腰になっています。部落に生まれたってことが友達に言えなくて、自分をごまかしているようで苦しい。・・・略・・・今日の全体学習に参加してよかったです。私は何をうじうじしているんだろうと思ったし、今の中学生はすごいなあと思いました。私ももっと頑張っていこうと思ったし、くじけそうになってどうしたらよいかわからなくなるまで、頑張らないかんと思いました。」

また、部落外から嫁いできた保護者のKさんは、全体学習参観後の短い時間を利用して、自らの揺れ動く悩みや思いの感想を、このように残してくれました。「全体学習の参観授業に保護者が消極的で残念です。でも子どもが頑張っているのにとあって今日も参加しました。私の両親は今でも町民全員が部落の人間だと思っています。このことは両親とか祖父母から教えられてきたことです。私の両親は部落問題に耳を貸そうとはしません。もっと本当のことを知ってほしいです。部落出身というだけで嫌われるのは納得できません。親は子どもの幸せを願いますが、心の底で結婚相手は部落の人でない方がいいなと希望する醜い自分にも腹が立ちます。今日は参加して子どもの意見も聞けたし、頑張るとるなと嬉しく思いました。」

さらに保護者のOさんは「生徒の意見の中に保護者のことがよくでる。私たち親こそ全体学習をせないかんと思います。学習後、子どもが家に帰って部落問題のことをあれこれと質問しても今まで十分に部落問題のことを学習していないので応えることができないし、自分が体験してきたこと、聞いたことなど、誤った考えを十分わからないまま応えてしまう。今まで学校の参観授業の参加も少なかったが、これからはできる限り参加して私も学習したい。」

このように学習後にいろいろな思いを寄せてくれることで、全体学習の持つ意味や、課題が見えてきます。学習会の参加や不参加、部落問題学習での発言などの一つ一つが保護者や家庭環境とつながっているのがわかります。そこで、本年度の家庭訪問では、全体学習をしてきたなかで、教職員や生徒の発言から自分自身の差別意識に気づいてきたことを、本音で話しをしていくこと

を目標に、取り組んできました。この家庭訪問は、自分の差別意識と闘いながらの家庭訪問でありました。

1年生の家庭訪問ではこのような話があったようです。

「先生ねえ、私は部落から逃げようとは思いません。だから娘にも絶対逃げてほしくないんです。私は職場であの人は部落の人だと言われて差別を受けたことがあります。でも絶対負けません。娘は自分が部落出身と言うことを小学校6年生で知りました。娘はただ泣いているばかりでした。その夜は久しぶりに添い寝をしてやりました。まだまだ部落と聞いただけで涙を流します。負けてほしくないんです。強くなつてほしいんです。だから何があっても学習会に行かせます。先生どうぞ宜しくお願いいたします。」

その先生は、自分の部落問題との出会いや差別意識のある自分自身のことを初めて語った時、ほんまの思いでぶつかる母親の姿に、本当の人間の生き方を教えられたという思いになったそうです。そして、板中の教職員が必死に頑張ってきた昨年度の「峠を越えて」を読んでくださいと頼み、手渡したとのことでした。

家庭訪問後、M子は、「私は小学生の時、学習会に行くのが嫌だった。しかし、部落問題学習の時にはお母さんに行きなさいとよく言われた。お母さんは部落差別のことをよく話してくれた。私はあんなに差別問題のことに熱心なお母さんを今まで見たことがなかった。これから先、ずっと差別から逃げないで頑張りたいと思う。」と生活ノートにこのように綴ってきました。

また、校内部落問題意見発表会のあり方も変わりました。教師が学級代表を1名選び、15学級の代表が全校の中で発表していた意見発表会から、まず、それぞれの学級の中での意見を発表し、互いの思いを理解し合い、その学級の代表2名～3名が学年の中で自分の思いを発表し、その後、学年全体で話し合う。さらに学級代表1名が全校の中で発表する形式を取ったときに、それまでの部落問題意見発表会とは全く違うものになりました。学習会に参加しながらの部落問題に寄せる思いは勿論、学習会から逃げていたときの自分の気持ちや、家族が就職差別に合い苦しんだ様子など、心の奥底に隠していたつらい思いを語れるように変わってきました。

このような学校の取り組みにより、学習会の部落問題学習でも課題が明確になり、より深い学習につながっていきます。生徒たちは自分と同じ悩みを持った多くの友と語り合いたい希望を持っています。学習会の会場である生徒は「学習会ってこないかんの、人数が少ないときがあるのでつらいし、寂しい。学習会が少人数の時はただの集まりという気がする。全員が集まって、学習会になる。また、みんなで部落問題を話し合うことで解決していくのに参加者が少ないときは腹が立つ」と涙ながらに語りました。「何で学習会ができたのかなあ？差別はもうないのかなあ？友達が参加できないからって学習会を休んでしまったら学習会の火が消えてしまうんでないか。」等の話し合いの中で、頑張る決意を生徒はするが、それと共に生徒が頑張るだけではなく、我々の取り組みの甘さも痛感させられてきました。そんなことがあり、学習会の運営方法も変わりました。好きな部活動に専念できず、部活動に思いも残しながらも途中から切り上げ、学習会に参加する生徒も多くいるため、今は毎週木曜日を学習の日として、学校の部活を全面的に中止にしています。部落外の生徒は家庭で学習し、学習会参加の生徒は早い時間から5会場のいずれかの会場で一斉に学習できるようにしました。

また、部落問題学習については各会場合同の全体学習を実施することにより、多くの生徒や教師の参加を生みだし、仲間との連帯意識が高まると共に、自分の問題としての話し合いにも深まりができました。このような全体学習を実施していくことで生徒たちは心理面で大きく変化し、ある生徒はこのように思いを綴りました。

父さん母さんへ

この頃お父さん、お母さんの子どもでよかったとよく思います。私がもしお父さんお母さんの子どもでなかったら、部落差別にこんなに自分の思いをぶっつけることはなかったと思います。お父さんとお母さんのように私も結婚差別にぶつかるかもしれないけれど、絶対それに負けない強さをいつまでも持っていたいです。

学習会の部落問題学習のあり方が変わると同時に、一泊研修の持ち方もこれまでの親睦を中心に行っていたものから、学校や学習会での部落問題学習をさらに熱くしていくかのような一泊研修に、自然に変わりました。この一泊研修では学年や会場を越えて、生徒や教師が部落問題についての悩みや思いを出し合いながら互いにより深く理解し合い、連帯の絆を強め、部落差別をはじめとするすべての差別の解消への意識を高めていくことを目的としました。学年でした部落問題学習の反省も全体学習の反省も交えながらのキャンプファイヤーでは班代表の生徒が次々に自分たちの誓いの言葉を述べていきます。次に、各会場で今まで十分発言できなかった生徒も、暗闇の中に燃え上がる炎を見つめながら、自分と部落問題の関わりを明らかにしていきます。そこには一年生も二・三年生も教師でもなく、一人の同じ人間として、怒りの声を、今まで私たちの心の中にあつたこだわりを、すべて吐き出すかのように、誰もが叫び続けていく姿だけがあつたように思います。マイクを通して部落差別に怒る声を、差別に立ち向かう決意の声を、参加者それぞれが心の中に刻みつけ、キャンプファイヤーを閉じました。

学年や学級、学習会での取り組みが相互に部落問題学習への意識を深め、自分の差別意識と向き合っていきます。

これまでの学習の積み重ねは、中学3年間の部落問題学習で終わりではなく、卒業しても高校生や社会人になっても一人一人が反差別の気持ちを持ち続け、部落差別をはじめ、さまざまな差別の解消に向かって運動できる主体者となっていかなければなりません。しかし、自分の希望する進路とは別に入試という制度のもと、それぞれの仲間意識や進路が分断されます。社会の差別構造の現実突き当たり、ややもすればこれまでの部落問題学習に疑問を持ち、自分さえという思いになりやすいが、それぞれが自分の進路に寄せる気持ちを話せ、そのことをまわりの者が理解し、自分の進路に目的や希望がもてたときにそれぞれの進路でも頑張っていけるし、いつまでもつながっていける仲間になっていくのだと思います。ある生徒は3月31日付けの徳島新聞の「読者の欄」に次のような手紙を投稿しました。

三月十八日、私は無事志望校に合格しました。合格するまでの道のりは厳しく、とっても苦しかったです。それは高校入試を簡単に考えていたからでした。今の成績では志望校は難しいとわかり、必死で勉強したけど成績は思うようにあがらず、途中で志望校をあきらめて他の高校に変更しました。・・・中略・・・今まで以上に勉強し、毎日が本当に苦しいものでした。その苦しみを乗り越えて頑張ることができたのは高校に合格して同和教育をやったからです。担任の先生もそのことを知っていたので勧めてくれたのだと思います。合格した今、先生の期待に応えられるように先輩、友達と一緒に、苦しいことやつらいことも中学時代にみんなで取り組んだ授業を思い出して、高校でも自分の思いを語って部落問題の解決に頑張ります。このように部落問題学習に燃え続けていく多くの生徒が育っていきました。

「先生板中の体育館を貸してください。もう一度全体学習をしたいんです。板中であれだけ誓い合って卒業したけれど何も行動できない自分や仲間の姿を見るとき、もう一度自分に何ができるか確認したいんです。」と、本校の卒業生が訴えてきました。そこには今の自分の意識を確認しようとする卒業生の姿があり、部落、部落外を問わず多くの卒業生や本校の生徒、中学校や高校の教職員が大勢参加しての話し合いが行われました。

このように卒業生が板中の体育館に集い、部落問題についての話し合いをするとき、92年に

全体学習を通して自分の差別意識に気づき、熱い思いを答辞に託して卒業した生徒たちの思いがよみがえります。

「答辞、今静かに目を閉じますと過ぎ去った3カ年のさまざまな思いが浮かんでまいります。何もかもが新鮮で期待と不安に胸を膨らませながら臨んだ入学式。クラスが一つになり、友情の輪を広げた体育祭や文化祭。また、2年生の修学旅行は自然の雄大さに感動し、戦争の悲惨さにふれ、平和への願いを強くした貴重な体験でした。真夏の太陽の下で、雪の舞う寒さの中で友と励まし合い、厳しい練習に耐えた部活動。自分との闘いだった受験勉強。そして、学年、学校全体で取り組んだ部落問題学習。私たちはこの部落問題学習で涙を流しながら自らの思いを語る友と、差別への怒りに震えた友と共感し合い、支え合い、仲間の絆を深め合うことができました。「本音を語る」たったそれだけのことがどれほど苦しいことなのか、私たちはこの学校で、この体育館で初めて知りました。部落問題学習に取り組んでいた時の私たちは「輝いていた」と自信を持てることが出来ます。私たち卒業生は、この差別と闘おうとする炎を、体を熱くする炎を今、在校生の皆様にも託します。」と、一言一言噛みしめるように読み上げ、卒業しました。

この答辞を聞きながら、板中に差別意識を持って赴任した当時の自分の姿が思い浮かびました。その差別意識を払拭していくために、板中の生徒や保護者、教職員の人たちから全体学習を通して多くのことを学び、変わりつつある自分の姿があります。

今、部落差別を始め、すべての差別の解消のために立ち上がっていく子どもたちを育てていくためには中学校の3年間の取り組みは勿論、就学前～高校や保護者との連携を密にし、解放運動に学び、共に連帯しながら社会生活の中にある差別の解消に取り組んでいく大切さを感じています。



分散会で司会 阿部教諭（於 新町小学校）



分散会報告 富加見教諭（於 新町小学校）